スペインタイルで町を彩り、人を呼ぶ

特定非営利活動法人 みなとまちセラミカ工房

理事長
阿部 鳴美さん
あべ　なるみ

震災前に陶芸サークルを主宰していた理事長の阿部さんは、「女川になくなってしまった景色やいろんな思いをスペインタイルに描いて街中を明るく彩りたい」という思いから、震災後にスペインタイルの工房をオープン。地域の仲間6人とともにNPO法人「みなとまちセラミカ工房」をスタートさせました。

この間、阿部さんは何度も東京に行ってスペインタイルの技法を学び、スペインバレンシアにも視察に行きました。そこで見た色鮮やかに彩られた街並みに希望を感じ、懐かしい風景や未来予想図を描いたスペインタイルで女川のまちを明るく彩りたい！と思ったと言います。2015年に完成した新しい商店街はたくさんの色鮮やかなスペインタイルで彩られ、町に住む人々や訪れる人々の心を明るく彩り始めています。

なぜスペインタイルなのか

津波で公民館分館にあった焼成窯や電動ろくろもすべて流されてしまい、阿部さんは陶芸サークルを解散しようと考えていましたが、被災地支援に入っていた京都造形芸術大学から窯を寄贈されることになり、また陶芸ができる！という希望の光が灯りました。折しも、町の復興連絡協議会の中で異文化交流の話が持ち上がり、その中でスペインの伝統文化であるスペインタイルに関心を寄せた女性がいて、紹介を受けたことがスペインタイルとの出会いです。その女性に誘われるがままにスペインタイルアート工房東京教室へ通い、技法を学び、2012年3月にはスペインバレンシアへ研修旅行に行きました。色鮮やかに彩られた街並みに希望を感じ、懐かしい女川の風景や思いをスペインタイルに描いてまちを明るく彩りたいという思いが生まれました。スペインタイルは、1,000度近い高温で9時間かけて焼き上げることで何年経っても絵柄が色褪せることはありません。

描いた思いを事業にしていくため、内閣府の復興支援型地域社会雇用創造事業の「新たな一歩プロジェクト」に申請したところ、幸い『みなとまち女川スペインタイル事業』は採択され、2012年6月には「きぼうのかね商店街」の仮設店舗に工房を構え、仲間6人とともに2013年4月にNPO法人として工房を立ち上げました。思いの実現のためには、タイル製作の高い技術が必要であると考え、その創業補助金250万円の大半は東京での研修に費やし、自らの技術を磨きました。

趣味ではなく「売れる商品」に

工房では、作品の製作と販売、体験教室を実施しています。初めのころは、技術を学びに通っていた東京のスペインタイルアート工房でのつながりからいくつかのデザインを譲り受けて製作をしていましたが、売上を増やすためには独自の新しいデザインが必要でした。そこで、様々な事業支援を行う仙台市の創業スクエアに相談を持ちかけたことが大きな転機になったと

▲スペインタイル絵付け体験の様子

▲復興公営住宅「おらほの壁画プロジェクト」絵付けの様子

阿部さんは言います。

地域性を生かした新デザインのコンセプト設計から具体的なイメージ案まで、工房のスタッフ全員で女川を象徴するモチーフを挙げ、4人のイラストレーターの協力を得て20種類ものデザインが生み出されました。工房スタッフ6名は全員、震災前の女川の風景を知っています。見慣れた、当たり前の風景「観光桟橋」「赤白灯台」「雄勝につながる桜のトンネル」「海上獅子舞」などたくさんの思い出が浮かびました。そうした懐かしい思い出をタイルに表現し、一過性の復興グッズではない、これからの女川の町を彩るデザインが完成しました。さらに、デザインの専門家がいなくとも一つひとつのパーツを自由に組み合わせてアレンジできるような工夫も取り入れ、その後の事業展開に大きく活かされています。

企業とのコラボレーションで大きく前進

2014年、JR女川駅舎の完成とまちびらきを1年後に控えた女川町には、外部からの支援の声がたくさん届いていました。その中の一つ、サッポロホールディングス（株）から町役場の紹介を通じて寄付の話が舞い込みました。株主からの寄付に同社が同額を上乗せして寄付をするというものです。そのためには申請書を、とすぐさま工房のスタッフ全員でストーリーを描き、街並みを彩る店舗や事業所の看板をオリジナルのタイルで彩りたい、まちをタイルで輝かせる！という思いで「きぼうの星プロジェクト」の企画書を作りました。デザインの一部にサッポロビールのトレードマークである星をあしらい、街中にきぼうの星を輝かせようというプロジェクトです。

また、通販会社フェリシモとのコラボレーション企画「女川まちづくりスペインタイルプロジェクト」も実施しました。当初、商品づくりの依頼でしたが、通信販売ができるほどの数を揃えられる体制がなかったことから、オリジナルのタイルデザインをもとにしたアクセサリーやスカーフ、バックなどをコラボして作り、寄付付き商品として販売するという企画になりました。そこで集まった基金で同じデザインのタイルを製作し、街に設置をしていくというもので、女川町役場の協力も得ながらプロジェクトは進みました。

さらに、フェリシモが震災直後に開設をした基金をもとにした「とうほく IPPO プロジェクト」にも採択され、街に設置されたタイルを紹介した「女川タイル散歩マップ」を製作しました。「お気に入りのタイルを探しながらまち歩きを楽しんでほしい」と呼びかけ、町に訪れる人々との交流にもつながりました。この基金の支援は、2016年度も受けています。

製作に欠かせない設備投資はそれぞれのタイミングで外部資金を活用し、継続と着実なステップアップにつなげてきました。当初から戦略的に事業化を進めたわけではなく、様々なつながりや声がけ、気持ちの通ったあたたかい支援を前向きに捉え、ただひたすら「女川の街を明るく彩る」ことを目指してきた結果と言えます。2015年12月、女川駅前プロムナードの商業施設「シーパルピア女川」に出店をしました。そして今年の4月には、震災後に阿部さん自身が技術を学びに行っていた東京の「スペインタイルアート工房」の宮城女川教室が開講します。東京と大阪に続いての開講です。普段から技術指導など、様々なサポートを受けてきましたが、教室の開講により新たな仲間が増えることも期待できます。

「女川と関わる人の数だけ、まちが彩り豊かになっていく」そんな期待に、夢は広がります。

特定非営利活動法人
みなとまちセラミカ工房

＜問合せ先＞
〒986-2261 宮城県牡鹿郡女川町
女川駅前シーパルピア女川E棟21
TEL/FAX▶0225-98-7866
E-mail▶ms_cobo@ybb.ne.jp
URL▶http://www.ceramika-onagawa.com